清酒愛情

光岡　明（作家・熊本近代文学館長）

いま地域分権の思想ばやりだが、清酒の世界ではいつの間にか灘もの信仰が消えて、地酒がなんのふしぎもなく、その地域でまかり通っている。「うちは灘ものしかおいていません」というのは、ひと昔前までは高級な店だったかもしれないが、いまどきそんなことを言えば「コーラじゃあるまいし」と席を立つに違いない。

実際のはなし、旅に出て店に入り、酒を注文するとき、**「ここの地酒はなに」と聞き、それを飲むのは楽しい。**

地酒には、地方の真の生活がある。

うまい、まずいは別である。その地方、地域が永年かかって作り上げてきた地酒には、それなりの重さとふくらみがある。地酒の味といっても、その味はその地域の香といっしょになっているもので、酒だけがぶがぶ飲んだって仕方ない。そこの香と酒が相乗効果の味を生むのである。**つまり地酒には地方の生活がある。**

さらに、清酒の世界は選択の自由が大きい。大量生産・大量消費、画一の時代から、多品種・少量生産、選択の時代へ移った。大衆は少衆、分衆、階衆へ変化したとは、ここ数年言われつづけていることだが、清酒の世界がもっとも進んでいるのではないか。熊本県内だけみても十四の醸造元が、それぞれに工夫をこらした酒を売り出しており、その上、最近は秋田、新潟、石川（もちろん灘、伏見も）あたりの地酒をそろえた酒の小売店が増えてきた。飲み屋にもある。その棚の前で、きょうはどれを飲もうかと思案するのは、酒飲み、消費者の特権である。

選択するとき、熊本人だから熊本の酒を、と考えるのは人情だし、私も原則としてそうしているが、ときに石川あたりの酒を飲んで「うん、これはうまい」と悦に入るものの、それも熊本の酒の味の確認につながる。熊本の醸造元にそのニュース、実感を伝えるのも、熊本の酒を愛する人間の義務だろうと思っている。それにしても新潟あたりの醸造元は、なんの名簿で知ったか知らないが、私の自宅にもしゃれたカタログを送ってきて売り込むなど、見事な商売をしている。もっとも大抵が限定品で、注文したときにはもうないが……。

こういう草の根の生活に支えられた酒は、それぞれの持色を持っているわけで、私などはそれを楽しんでいるのだが、気になる傾向は最近の吟醸酒ばやりである。この吟醸酒が清酒の売り上げを押し上げているのだから、私の文句は見当違いなのだろうが、限りなくワインに近く、限りなく水に近く、かつ一定の芳香を持った**吟醸酒が、清酒の地域性を喪わせるような気がしてならない。**

全くの私見だが、第一、冷やで飲むというのが気に入らない。かんをつける酒は世界中でも日本酒と老酒だけだと聞く。そんな特色のある清酒をなにもワインの模造品にすることはない。しかも全国画一の味になってきている。若い人が好むから仕方ないという業界の声も知っている。生活様式が変ったのさというわけ知り顔の解釈も知っている。しかし、私はなんとしても不満である。私たちは高度経済成長に乗って、大量生産の画一的商品を費消し、その反面、地域と伝統に根づいた、**つまり生活に根づいたものをどれだけ喪ってきたか、**考えてみればいい。画一的商品に支えられた生活が真の生活でないことに、やっと気づいたばかりではないか。

だけど、ま、吟醸酒がはやるだろう。二級酒、アツかんの私は、カウンターの隅に座る以外にない。